《短 信》

辞書編纂における研究者の責任

工 藤 力 男

『日本国語大辞典』第二版の刊行が始まる。四半世紀を費やした改訂の成果だという。特に，用例の見える文献の年時をキリスト紀元で記すのは，範としたらしい“The Oxford English Dictionary”(OED)に一歩近付くものと言えよう。初版の刊行された時期，わたしは駆け出しの大学教員で，それが手元に一冊ずつ届くのをいつも待ちわびていた。いま，第二版の刊行を心からうれしく思う。

この辞典から受けた恩恵は数えきれないが，不満もある。わたしが籍をおく大学の国文学科では，一年次必修科目に，二単位の「基礎演習（Ⅰ～Ⅳ)」を設定している。わたしの担当するⅢは国語学の基礎を学ぶものである。本年度は，さまざまな辞書とその周辺の文献に慣れることを目指している。そこでは，古代から現代までの用例が得られて信用できる大型の辞書として，『日本国語大辞典』を紹介している。ただし，「語源説は無視せよ」の注意を添えて。

この辞典の特徴を初版に即して言うと，用例の範囲の広さ，方言項目の充実，アクセント史・古辞書の掲出など，いずれも有益なものであった。第二版ではさらに，語誌・同訓異字・上代特殊仮名遣い・表記史などの欄を新設するという。使用者の便利さはいよいよ高まることであろう。しかし唯一，語源説は読者を誤らせるものである。わたしはそのことを別の機会に書いたことがあるので，第二版にそれが踏襲されたことは残念でならない。これまでの経験では，語の変遷について少しでも考えようとする学生が，往々にしてこの辞典の「語源説」に引っかかった。わたしはそのたびに，その語源説のほとんどが語源とは無関係だということを，懇々と諭さなければならなかった。それで今は先手を取って，一年次の必修科目の初めに言うのである。

この辞典初版の「朝（あさ)」には，十七の出典から八つの語源説が掲げてある。その(1)は，冠辞考・大言海などの「アシタの約」である。もし確かにそうだとして，しからばアシタの語源は何だろう。仮にそれがXだとしても，Xにもまた語源があるはずだ。それをYとしよう。ならばYの語源は……。この問には果てがない。アシタ説は仮名返しに過ぎないし，アサとアシタの関係を，拘束形式と自立形式の関係と知っている我々に無意味であることは言を待たない。

以下，(2)「アク(開)」の意。(3)アケル(明)のアと，接尾語サあるいは少または早の意。(4)「明けさま」か。(5)ア音は陽精の発起，サ音は生化の初め。(6)アはアカの約，サはスサの約で明進の意。(7)朝，もの食べることからアサル(求)の義。(8)「翼早」の別音A-sa，翼は夜の明ける義，早は暁の義。締めて十二行。

第二版の内容見本には，辞典類・論文・随筆などから「丹念に探」って充実した語源説欄の例として，「おさめる（治・修）」（文語形「をさむ」）の項を掲げる。それは次のとおりである。（1）ヲサ（長）の活用語。（2）ヲサマル（長完）の他動詞形。（3）ヲサメ（長際）の義。（4）ヲサアム（長編）の約。（5）ヲスメ（緒統）の転呼か。（6）ヲは音の下略，サムルは定ムルからか。

（1）のヲサムがヲサ（長）に由来するという俚言集覧・大言海の説明には異存がない。が，これを〈語源〉とするなら，わたしはやはり問いたい，それでは，ヲサの語源は何なのかと。ヲサムはヲサからの派生語，そのヲサは動詞「ヲス（治）」からの派生語か，とわたしは考えている。ヲスが何に由来するかは分からないが，それでいい。（2）は和訓栞の説だが，これがヲサマルの他動詞形だとは中学生にも分かること。だがわたしはこれを〈語源〉とは言わない。

右の（1）・（2）は〈語源〉説ではなく，〈語構造〉の解釈である。その限りでは妥当である。だが，語源説となると事情は違う。語源とされたヲサは，ヲサムの前身を推定したに過ぎないからだ。これを〈語源〉だというのは，先祖を尋ねられて父母の名を告げ，信濃川の源を問われて千曲川と答えるようなものである。

この辞典が範としたらしいOEDは語源の掲出に熱心である。これは英語の辞書一般の特徴でもある。二百年に及ぶ印欧語比較研究の成果があるからである。その語源の記述は，英語史をさかのぼって得られた最古の確かな語形を求める，他の言語あるいは他の語派との交点に求める，その交点から推定される直前の言語を求める，これが比較言語学の節度である。同系語が証明されていない日本語に，英語のような語源は書きようがない。アサは「朝」の最古の確かな語形なのだから。

日本の大型の古語辞典，例えば『時代別国語大辞典上代編』『角川古語大辞典』小学館『古語大辞典』は，語源を掲げていない。わたしは，これが良心的な態度だと考える。研究者には周知のことだが，若干の語源を記した小型の辞典に『岩波古語辞典』がある。巻頭の「用語」の解説には，アサ（朝）・アサテ（明後日）・アス（明日）・アシタ（朝・明朝）に共通する観念を想定して，asという〈語根〉を抽出し，これらを〈同根〉の語としている。さらに，古代日本語と朝鮮語の間に類似する単語があるばあい，系統関係は十分証明されていないので借用か同系か未詳だが，それを一括した概念として〈同源〉という語を用いるとしている。これは一つのすぐれた見識だとわたしは考える。

『日本国語大辞典』には〈語源〉についての見解が明言されていないのに，右のような説を羅列したのはなぜだろう。研究者に語源説の資料を提供しようとでもいうのか。だが研究者は，そのほとんどが荒唐無稽であることを知っている。むしろ，しろうとがこれを無批判に扱う危険をわたしは言いたい。二年ほど前だったか，日本放送協会総合テレビの番組「日本人の質問」で，ネズミの語源について質問が届いているが，まだ分からないので，という趣旨を司会者が言った。問うた人と答えたがわ両方の発言に，多く

の日本人の言語意識がうかがえるようだ。そのような人々に，この欄は読まれるだろう。

この辞典の第二版には「語誌」の欄を新設したという。内容見本にはそれが筆頭に紹介されている。これこそ，語源説欄に代わるもの。「おさめる」の語源説(1)・(2)は，ここに〈派生〉・〈対応〉として書くべきことである。用例の選択，語義の記述は辞書の生命と言われる。膨大な用例から最適なものを選ぶにあたって，編集委員の判断が大きくはたらいたに違いない。ほかに，例えばアクセント史の資料については，慎重な配慮の末に誤点を捨てたに違いない。それに比べて，「朝」の語源説八つ，「おさめる」の(1)以下のそれに，編集委員のいかなる価値判断がはたらいたのだろうか。

両版の編集委員として，本学会の要職にあった人たちの名が見える。その人たちはいかなる理念によってこの語源説欄を設けたのか，社会に及ぼす影響をどのように考えたのか。語源についての見解が編集委員のそれと卑見とは異なるかも知れないので，わたしは知りたい。これは一辞典にとどまるものではなく，学界にとっても重大な問題だと考えるのである。

——成城大学教授——

(2000年11月26日　受理)